筑紫女学園大学リポジト

Le monde souterrain chez le Voyage en Orient de Nerval

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE,Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1027

ネルヴァルの『東方紀行』における地下世界

間　瀬　玲　子

Le monde souterrain chez le *Voyage en Orient* de Nerval

Reiko MASE

Ⅰ．序

ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval（1808－1855）の『東方紀行』*Voyage en Orient*（1851）には「朝の女王と精霊たちの王ソリマンの物語」*Histoire de la reine du matin et de soliman, prince des génies* という話が挿入されている。この物語には地球の衰えに関する重要な一節があり、そこに著者（ネルヴァル）による原注がついている。この原注に関してはネルヴァルの勘違いや記載ミスが指摘されてきた。しかしネルヴァル研究にとって避けては通れないこの原注についてこれまで刊行された『東方紀行』の校訂版の注を検証しながら考察したいと考えている。最後に原注に記載されている『アダム以前に創造された人間』について紹介をする所存である。

Ⅱ．『東方紀行』の「朝の女王と精霊たちの王ソロモンの物語」で問題となる箇所

今さらではあるが「朝の女王と精霊たちの王ソロモンの物語」（以下「ソロモン」と略す）を整理しておこう。講談師が語り手「私」に対して話をするというスタイルをとっている。ソリマン＝ベン＝ダウド（ソロモン、ダヴィデの息子）の僕であるアドニラムがこの物語の主人公である。10万人以上の職人のトップである。バルキスはイエメンを統治している女王の名前である。アドナイは崇められ、まつられている存在という想定となっている。本論文では朝の女王と表記する。

問題となる箇所は「ソロモン」の6「幻」VI　L'apparition の最後である。地球の衰えを指摘している。地球にはもともと7つの基本金属があった。地球の地下世界の危機を訴えている。

> … la terre, dont la moelle se congèle et se dssèche, n'en reçoit déjà plus que cinq *.（1）

> その髄が凍結し、枯れている地球は、すでに5つ（金属）しか受け取っていない。

この文章の最後にネルヴァルによる注がついている。この原注は非常に長いのであるが、その一部を引用する。

Les traditions sur lesquelles sont fondées les diverses scènes de cette légende ne sont pas particulièrement aux Orientaux. Le moyen âge européen les a connues. (2)

この伝説の色々な場面の基となっている伝承は特に近東諸国人のものではない。ヨーロッパの中世はこれら（伝承）を知っていた。

ネルヴァルはこの文章の後に伝承の具体的な例を挙げている。

l'Hisoire des Préadamite de Lapeyrière ラペイリエールの『アダム以前に創造された人間の歴史』
（書名と著者名が間違っている。préadamisme はアダムがユダヤ人の祖にすぎず、それ以前に神は人間を創造したという説のこと。préadamite はアダム以前に創造された人間のことである）
l'Iter subterraneum de Klimius クリミウスの『地下世界』
（著者名が間違っている。ネルヴァルはクリミウスを著者名だと勘違いしている。）
kabbale カバラ
la médecine spagyrique 錬金術医学
（錬金術、哲学、天文学、占星術、美徳を柱とする医学）
le Thalmud タルムード
Koran コーラン
le livre d'Hénoch『エノク書』

過去に『エノク書』と『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』について論じたことがある。(3) ネルヴァルの『エノク書』に関する記載は不正確であると研究者たちから指摘されている。またクリミウスは人名ではなく、正確にはホルベリ（他の表記法もあり）の『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』が正しい著者名、書名である。このようにかなり問題がある原注である。しかしここに記載された書物や事項こそネルヴァルの思想的・宗教的な背景の一部であると考えられる。

この原注に対して『東方紀行』の校訂版の編者たちはどのような注をつけたのかを検証してみよう。本論文の中心課題である箇所と関連のある指摘を列挙する。

まず1950年に刊行されたジルベール・ルージェが編集した『東方紀行』の注には以下のように書かれている。

Isaac de la Peyrère (et non Lapeyrière) soutint dans ses *Prœadamitæ* (1655) que la terre de Chanaan était peuplée bien avant l'apparition d'Adam. (...) La médecine *spagirique* se fonde sur l'alchimie, aincinnemet applée *spagirie*. (4)

イザアク・ド・ラ・ペイレール（そしてラペイリエールではない）は彼の『アダム以前に創造された人間』（1655）においてカナン（地中海とヨルダン川に挟まれた地域の古代の地名）の土

地はアダムの出現以前に人が住んでいたと主張している。（中略）錬金術医学は錬金術に基づいていて、昔はスパジリーと呼ばれていた。

この校訂版の注では上記のように『アダム以前に創造された人間』の内容を非常に簡潔に書いてくれている。また錬金術も分かりやすく説明をしてくれている。(5)『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』（1741）は同年フランス語訳が出版されたことを記している。また本作品はカバラの作品ではなく、地球の真ん中に位置して、動く木が住んでいる惑星における空想物語だと断言している。そしてネルヴァルが著者名と書名を混同していることも指摘している。また『エノク書』に関してもかなり詳しく言及している。『エノク書』は（ユダヤの黙示録、そのエチオピア版草稿は18世紀の終わりに発見された）いくつかの翻訳がイギリスで出版された。リチャード・ローレンスによる『エノク書』など3冊を紹介している。これはネルヴァルの原注が間違っていることを暗にほのめかしていることを意味している。なお他の項目に関しては一切言及していない。これはかなり不思議であると考えられる。数は多くはないが、非常にインパクトのある図版が魅力的である。

次にジャン・リシェ編集の旧プレイヤッド版の注を見てみよう。旧プレイヤッド版の編集そのものに問題があったことは事実である。しかしその注には今でも参照すべき点がある。

Cette note contient des indications si vageus et si peu exactes qu'on peut se demander si Nerval a jamais ouvert les livres auxquels il fait allusion : Isaac de La Peyrère (et non Lapeyrière) soutient dans ses *Præadamitæ* (1655), en s'appyant sur *l'Épître aux Romains*, que la terre était peuplée bien avant Adam. (6)

この注はとても曖昧で、正確さに欠けており、ネルヴァルが暗示している本をかつて開けたのかを問う気になる：イザアク・ド・ラ・ペイレール（そしてラペイリエールではない）は『アダム以前に創造された人間』（1655）において、『ローマの信徒への手紙』を強調しながら、地球にはアダム以前に確かに人が住んでいたと主張している。

編者の手厳しい指摘はもっともである。ネルヴァルの記述は確かに不正確である。ここで特筆すべきことは『アダム以前に創造された人間』が『ローマの信徒への手紙』を強調しているという指摘である。これがジルベール・ルージェの注との最大の違いである。ネルヴァルが列挙した本を実際に手にとって真剣に読んだとは言えないと考えている。ただしネルヴァルが列挙した書物の存在を知っていたという事実は否定できない。旧プレイヤッド版の編者はルージェの校訂版の注の文章を一部真似をしていることも指摘しておきたい。

次に出版されたのはミシェル・ジャンヌレ編集の「ガルニエ・フラマリオン」のポケット版である。注には以下のように書かれている。ポケット版という制約もあり、注の記述の量は少ない。

Série de références vagues et attestant, dans les lectures de Nerval... (7)

この後にイザアク・ド・ラ・ペイレールの『アダム以前に創造された人間』、ホルベリ『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』『エノク書』を列挙している。カバラ、錬金術、タルムード、ネオ・プラトニズム、コーランへの未分化な参照は少しぞんざいである。ただしこの注は多少正確さに欠けている。ジルベール・ルージェの注をそのまま真似している。ホルベリの『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』の原書及びフランス語訳には著者名は記載されていない。よって断定はできないが一般的には Ludvig Holberg であり Louis de Holberg ではない。この編者もネルヴァルの原注には批判的であることだけは確かである。

さて次は新プレイヤッド版である、新と言っても刊行されたのは1984年である。ネルヴァル研究が成熟期に入った時期であり、注も非常に冷静かつ正確に書かれている。編者はジャン・ギヨーム Jean Guillaume とクロード・ピショワ Claude Pichois である。ネルヴァルのこの原注に対して、新プレイヤッド版の編者は1ページと4分の1を費やしている。それ以前の校訂版の編者たちがネルヴァルの多少荒っぽい記述に対してかなり批判的であったのとは対照的である。ネルヴァルを貶めるような事は一切書かれていない。この編者はネルヴァルの膨大かつ多少杜撰な記述の中にネルヴァル文学の神髄があると確信していることを感じさせてくれる。校訂版とはかくあるべきであるという模範を示していると考えられる。(8)

注は5つある。一つ目の注はラ・ペイレールの『アダム以前に創造された人間』についてである。この書物に関しては次の章で再度論じることにする。著者名が間違っていることは原注につけられた注でしっかりと指摘している。しかし文字が非常に小さくて目立たない。2つ目の注はホルベリの『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』に関するものである。編者はラテン語の原書がフランス語に翻訳されたこと、そして同書の内容を非常に冷静に記述している。最後に同書の中の想像上の国が同時代のヨーロッパを風刺していることも指摘している。プレイヤッド版の編者はネルヴァルが著者名と書名を勘違いしたことを書いてはいない。3つ目の注は spagirique に関するものである。それまでの校訂版では詳細な注は誰も書こうとはしなかった。医学という観点から spagirique と galénique の対立を明記している。galénique はギリシアの名医であった Galien を由来とする単語であり、ガレノス学派のという意味である。『ラルース大辞典』及び『リトレ』を言及している。4つ目の注はネオプラトニスムに関する注である。文献の翻訳の紹介だけである。5つ目の注は『エノク書』に関するものである。この注が5つの注の中で最も長い注である。すでに述べたように過去に『エノク書』に関して論じたことがある。その論文ではネルヴァルの記述をもとに、どの本を参考にしたかを論じた。プレイヤッド版の編者は『エノク書』発見の歴史を詳細に記述している。論文執筆当時に得た知見と照らし合わせて、注を検証してみよう。『エノク書』は聖書外典の中で最も有名なもののひとつである。18世紀末に旅行者ブリュースによりエチオピアのアビシニアからもたらされたエチオピア断片しか残っていない。シルヴェルトル・ド・サシが部分的にラテン語に翻訳をした。その後リチャード・ローレンス氏が作品の全体を発表した。シルヴェルトル・ド・サシは1822年にローレンスの著作を報告した。ローレンス氏はカンタベリーの司教で

はなく、キャシェル（アイルランド）の大司教であった。編者は『エノク書』の記述を簡明に説明している。そして最後にネルヴァルが『赤い悪魔』において『エノク書』に言及していることを論じている。編者の『エノク書』に関する記述が正しいかどうかは研究を続けなければならないと考えている。(9)

次はジャック・ユレの校訂版に注目してみよう。まずラ・ペイレールの『アダム以前に創造された人間』、ホルベリの『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』の記述には問題がある。次の注は以下のとおりである。

> Nerval cherche une caution à ses《bizarres hypothèses scientifiques》, mais l'absence de référence précise (en ce qui concerne le Coran il serait bien en peine d'en fournir) suggère plutôt qu'il en est le seul auteur.(10)

> ネルヴァルは奇妙な科学的仮説に保証を探している、しかし正確な出典の欠如（コーランについては、それ（コーラン）を示すだけのことはあるだろう）がどちかと言えば、彼がその唯一の著者であることを暗示している。

ユレ氏は上記のようにネルヴァル原注について2つしか注をつけていない。しかも批判ではなく分かりにくい表現を使っている。

最後にガリマール社の「フォリオ・クラシック」シリーズのポケット版の注を紹介する。(11)このポケット版の編者は新プレイヤッド版と同じ人物である。よってネルヴァル原注に関する注の数は全く同じである。『東方紀行』を1冊のポケット版に収録しているのでおのずとページ数の制約があったと推察される。またポケット版の性格上注は簡略化されることも理解できる。よってプレイヤッド版に比べると、注が簡略化されている場合がある。

一つ目は次の章で言及する『アダム以前に創造された人間』に関するものである。2つ目はホルベリの『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』についてである。プレイヤッド版における意味不明な箇所が削除されている。3つ目は spagirique についてである。辞書における記述を削除している。4つ目はネオプラトニスムであるが変更はしていない。5つ目が『エノク書』についてである。プレイヤッド版で2度も言及したシルヴェストル・ド・サシに関する言及は削除している。ネルヴァルのどの作品で『エノク書』が言及されているかも削除されている。『エノク書』が古典シリア語からラテン語に翻訳されたという記述も削除されている。ポケット版の編者は『エノク書』に関する記述は非常に慎重になり、簡略にまとめている。

ネルヴァル原注に対して校定版の編者たちは総じて批判的であった。それはネルヴァルの勘違いや記述そのものの間違いのせいである。しかしプレイヤッド版の編者は、このネルヴァル原注を真摯に受け止めている。間違いも指摘をしている。すでに述べたように、ネルヴァルの作品には『東方紀行』以外にも記憶違いや記載ミスがあることは、よく知られている。ネルヴァルの文学世界の生成過程では正確な知識というより、かなり混沌として曖昧な記憶によって形成されていることを

ネルヴァルの研究史において認められるようになったと実感している。ネルヴァルは原注に列挙した作品名、思想に関する著書等を詳細に読んだわけではないかもしれない。しかしそこから何らかの影響を受けたことは否定できない。不思議なことに校訂版の編者たちは『タルムード』について一切言及していない。『タルムード』はユダヤ教の聖典である。⑿ ネルヴァルが『東方紀行』のみならず、他の文章において『タルムード』について言及していることは明白であるのに、その指摘がないのは奇妙としか言いようがない。

Ⅲ.『アダム以前に創造された人間』

すでに本論文で何度も言及したのがイザアク・ド・ラ・ペイレール Isaac de La Peyrère（生年は未確定、1590年代にボルドーで生まれ、1676年にオーヴェルヴィリエ、現在のセーヌ・サン・ドゥニで亡くなった）が発表した『アダム以前に創造された人間』*PRÆADAMITÆ*（1655）である。フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica に収録されている。1章から26章まで続いている。しかし全ページ数は52ページであり、記述言語はラテン語である。⒀ 新プレイヤッド版の注を要約すると「モーゼは『創世記』において人類の起源ではなく、ユダヤ族の起源について語っている。アダムは人類の最初の人ではなく、ユダヤ人の最初の人である。ネルヴァルはディドロの『百科全書』の該当する項目を読んで知識を得た。そして最後はデルブロを参照させる」と書いてある。⒁ デルブロとはバルテルミー・デルブロ・ド・モランヴィル Barthélemy d'Herbelot de Molanville（1625－1695）のことである。⒂ プレイヤッド版の注は非常に長く、ネルヴァル以外に他の作家もこの仮説に影響を受けたことも指摘している。ネルヴァルがラテン語で書かれた『アダム以前に創造された人間』の全文を読んだとは考えにくい。フォリオ版（ポケット版）の注はもっと短いが主要な点はプレイヤッド版と同様である。⒃ この編者の注が本当に正しいかどうかは検証の余地がある。ネルヴァルが『百科全書』やデルブロ以外から『アダム以前に創造され人間』の説を知った可能性がないとは断言できない。ネルヴァルが交流していた人たちからの影響も考慮すべきだと考えている。

Ⅳ. 結論

本論文ではネルヴァルが『東方紀行』の「朝の女王と精霊たちの王ソロモンの物語』のⅥ「幻」で書いた地球の内部で起きている変化に関する記述に注目した。「幻」の次の章がⅦ「地下世界」Le Monde souterrain である。『東方紀行』に挿入されているこの物語の中で最も長い原注である。過去の校訂版を紐解いてみると、かなり編者たちは批判的であった。それは序文でも書いたようにネルヴァルの原注が間違いもあるし、勘違いもあるからである。しかし新プレイヤッド版及びフォリオ（ポケット版）ではこの原注を真摯に受け止めている。それは言及された事項がネルヴァル世界にとって非常に重要だからである。過去に『エノク書』及びホルベリの『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』について論じたことがある。本論文では『アダム以前に創造された人間』を紹介した。それではこれらの事項がどのように組み合わさって作品が形成されたかは今後の課題としたいと考えている。

注

(1) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome Ⅱ, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》1984, p.721. 以下この巻をPL. Ⅱと略す。翻訳をする際に『ネルヴァル全集Ⅲ　東方の幻』筑摩書房、1998年に収録された野崎歓・橋本綱訳『東方紀行』を参考にした。『ネルヴァル全集Ⅱ』筑摩書房、1975年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳「暁の女王と精霊の王ソロモンの物語」の翻訳を参考にした。なおこの翻訳の注は旧プレイヤッド版を参考にしている。G・ド・ネルヴァル、篠田知和基訳『東方の旅　下』（世界幻想文学大系　第31巻B）、国書刊行会、昭和59年も参考にした。かなり古い本のリバイバルコレクションであるが、ネルヴァル、中村真一郎訳『暁の女王と精霊の王の物語』角川書店、角川文庫、平成元年（初版は昭和27年）の翻訳と中村真一郎氏による「はしがき」を参考にした。残念ながらネルヴァル原注の訳はついていない。しかし章ごとに版画がついており、作品の読解に際し、イメージが膨らむという利点がある。中には意味不明な図版も収録されている。翻訳は漢数字であるが、本論文では数字で表記する。

1　アドニラムの部下である職人たちが一生懸命働いている
2　動物を使った行列の一行
3　台座の上の動物の王
4　ソロモン王とバルキス女王
5　アドニラムと青銅の海の流れ
6　溶銅の流れの中心のアドニラム
7　窮屈な姿でうずくまっているカイン、苦しみにうちひしがれている
8　女性たちの集団
9　1名の男性が遠くの家を見ている
10　3人の職人たち、遠くのほうで2名の人が3人を見ている
11　倒れかけている人を別の人が助ける
12　3人の男性が死者を屍衣に包んで運んでいる

上記のように1～12まで図版を列挙してもストーリーがわかるわけではない。本文を読んだ後に見るための図版である。

(2) PL. II, p. 721.

(3) 間瀬玲子「『エノク書』がネルヴァルに与えた影響」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第4号、2009年1月、pp. 83-94. 間瀬玲子「ネルヴァルと『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』」『筑紫女学園大学研究紀要』、第15号、2020年1月、pp. 17-26.

(4) Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, texte établi et annoté par Gilbet Rouger, dessins de Yves Trevedy, tome IV, [Paris], Imprimerie nationale de France, 1950, p. 308. 出版都市はフランス国立図書館のカタログで確認した。各巻に図版が収録されている。「朝の女王と精霊たちの王ソロモンの物語」のページにはまずバルキス女王が台座に座り、お付きの者たちが運んでいる様子を描いている図版が印象的である。ただし21世紀にこのような図版を掲載すると、差別的な表現だと批判される要素はある。次はソロモン王とバルキス女王を中心とした祝宴が掲載されている。前の図版に比べるとバルキス女王の顔が明瞭に描かれている。細かいことであるが、この二人はお互いを見ていない。なおソロモン王の側近がソロモン王に何かを囁いている。この物語は講釈師が話者「私」に話をするというスタイルをとっている。次の図版はアビシニア人が聴衆の集まりの真ん中に飛び出して踊りだした光景を描いている。周囲の人たちは驚いていたり、冷静に眺めたりしている。次は恐怖でへたりこんでいるアドニラムを巨大な人物が凶器を持って威嚇している。次の版画は暗い谷間

を数名が移動している。「ソロモン」に関する図版は合計5枚である。悪くするとホラー小説のような印象を与えてしまう。図版はあくまで補助的なものであり、これでストーリーを考察するためのものではないと考えている。

(5) *Le Grand Robert de la langue française*, deuxième édition, tome 6, Paris, Dictionnires le Robert, 2001, p.646.『ロベール大辞典』の第2版、第6巻の646ページには《spagirie》《spagyrique》の両方が記載されている。この辞書によると spagirie は錬金術を意味している。1775年から使われている。spagyrique のほうが起源は古い。1548年にパラケルススがギリシア語の二つの単語（抽出するという意味の単語と集めると言う意味の単語）を組み合わせて作ったラテン語の単語が起源だと書かれている。パラケルススは1493年にスイスアインジールデンで生まれ、1541年にオーストリアで亡くなった化学者、錬金術師である。パラケルススは本名ではない。生前には本はほとんど出版されていない。波乱に満ちた生涯を送り、かなり若くして亡くなっている。死因は諸説がある。生涯のほとんどを放浪生活で過ごしたとされている。よって『ロベール大辞典』の1548年という記述が間違いとは言えない。パラケルススに関する日本語の文献もいくつか存在する。最初に澁澤龍彦『妖人奇人館』河出書房新社、河出文庫、昭和59年に収録された「放浪の医者パラケルスス」を紹介したい。澁澤氏によるペラケルススに関する記述により、ペラケルススの人となりが非常によくわかる。本書はもともと昭和46年に単行本として出版された本である。一般向けのわかりやすい書物として書かれており、ペラケルススという人物の全体像をつかみやすい。詳細な研究書として菊池原洋平　著、ヒロ・ヒライ　編集『パラケルススと魔術的ルネサンス』勁草書房、2013年がある。巻末の文献一覧の邦語文献には多数の書籍、論文が列挙されているので役にたつ。ネルヴァルはパラケルススの存在を知っていた。例えば『ニコラ・フラメル』ではパラケルスス医学という表現を使っている。『幻視者たち』の「カリオストロ」と「クイントゥス・オークレール」ではパラケルススという人名をあげているだけで、詳細な記述をしているわけではない。ネルヴァルが spagyrique という単語を知っていたことは非常に重要であるが、これだけで論文のテーマとするような材料はない。『19世紀ラルース大辞典』Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, tome 22, Nîmes, 1991, p.972には spagirie と spagirique は掲載されている。spagirie は化学に与えられた名前、spagirique も同様のことしか書かれていない。なおこの単語は現在流通している一般向けの仏和辞典には記載されていないような特殊な単語である。

(6) Gérard de Nerval, *Œuvres*, tome II, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1978, pp. 1408-1409. 旧プレイヤッド版の第2巻である。

(7) Nerval, *Le voyge en Orient*, II, Paris, Garnier-Flammarion, p. 377.

(8) PL. II, pp. 1606-1607.

(9) 村岡崇光　訳『聖書外典偽典第四巻　旧約偽典Ⅱ』教文館、1975年に収録された「エチオピア語エノク書概説」及び「エチオピア語エノク書」を参考にした。プレイヤッド版の注とは記述内容にかなりの違いがある。どちらが正しいのかを検証するのは非常に困難である。プレイヤッド版の注に2度も書かれているシルヴェルトル・ド・サシに関して、村岡氏の「エチオピア語エノク書概説」では全く言及されていない。また村岡氏が参照し、批判しているレオン・ハルト著、新井献・土岐健治訳『旧約外典偽典概説―付　クムラン写本概説―』教文館、昭和47年を参考にした。なお村岡氏はハルト氏の著作を引用しているが、表記が正確ではない。ハルト氏の著作にもシルヴェルトル・ド・サシに関する記述はない。シルヴェストル・ド・サシは1758年に生まれ1838年に亡くなったフランスの東洋学者である。よって日本やドイツの文献には登場しないのは仕方がないのかもしれない。関根正雄　編『旧約聖書外典　下』講談社、講談社文芸文庫、1999年に収録された新見宏訳「エノク書」及び新見氏による「エノク書」解説も参考にした。なおフランス国立図書館のカタログ、そして日本の CiNii で『エノク書』を検索してみた。とりわけ2000年以降に注目してみたが、わずか

な文献しかヒットしない。現時点で言えることは『エノク書』そのものの研究からスタートするより、ネルヴァルの作品の記述を基にして、『エノク書』に関する新たな研究書または研究論文を精査すべきだと考えている。『エノク書』の研究は言語上の複雑な問題、考古学による文書発見が絡むので非常に困難である。

⑽ Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, Volumes II, Présentation et notes par Jacques Huré, [Paris], Imprimerie nationale, 1997, p. 455. 出版地はフランス国立図書館のカタログで確認した。

⑾ Gérard de Nerval, *Voyge en Orient*, Paris, Gallimard, coll.《folio classique》, 1998, pp. 911-912. 以下 FC と略す。

⑿ ネルヴァルは著作において『タルムード』について言及している。ネルヴァルはジュリアン・チュルガン氏 Jukien Turgan の著書『気球』*Les Ballons*（1851）の序文を執筆した（PL. II, pp. 1245-1251）。この序文において『タルムード』を言及している（PL. II, p. 1245）。この序文と『東方紀行』は深く関わっている。ネルヴァルに大きな影響を与えた作家ラマルチーヌ Lamartine に関する言及など例をあげればきりがない。なおチュルガンは1824年に生まれ、1887年に亡くなった。科学雑誌の編集をしていた。ネルヴァルは本論文で問題としている原注以外にも『東方紀行』で『タルムード』を言及している。今後の課題としたい。現時点で言えることは、カバラ、『コーラン』『タルムード』を結びつけるのは精霊の王ソリマンだという説があるということだけである。

⒀ Issac de La Peyrère, *PRÆADAMITÆ*, [Amsterdam], Anno salutis, 1655.

⒁ PL. II, p. 1606.

⒂ プレイヤッド版の注にはデルブロとしか書かれていない。デルブロの著書は『東洋文庫』*Bibliothèque orientale*（1697）である。この本はネルヴァルが『東方紀行』の「朝の女王と精霊の王ソロンの物語」執筆する際に参考にしたとされている本である。ネルヴァルは自著においてデルブロ及び『東洋文庫』を言及している。

⒃ FC, pp. 911-912.

（ませ　れいこ：英語学科　教授）